

ブックレポートを用いたライティング指導の 授業設計と課題

佐野 正子

1. はじめに

近年、多くの大学で初年次教育の一環としてアカデミック・ライティング関連の授業が行われている。学生に課されるライティング課題としては、調査報告型レポート、論証型レポート、ブックレポート、小論文が挙げられる。菅谷 (2021) は、ブックレポートの利点として、レポートのテーマ選択の負担の軽減と、受講生の学習段階に合わせた難度の調整のしやすさを挙げている。また、適切な資料を引用する能力の修得にも、ブックレポートは適していると述べている。その理由としては、引用文献が対象資料 1 冊のみで作成可能であり、教師が受講生の引用の正しさをチェックする際、複数の文献に当たらずに済むため、フィードバックを行うのが容易であることとしている。

このようなブックレポートの特徴を、ライティング指導で活かすには、どのような授業設計が必要なのであろうか。

本稿では、山梨学院大学において 2022 年前期に開講された「アクティブ・リーディング I」におけるブックレポートを用いたライティング指導の授業設計について報告し、実践における課題を明らかにする。

2. ブックレポートとは

レポート・論文には複数の型がある。井下 (2014) は、大学のレポート課題として、説明型・報告型・実証型・論証型の 4 つを挙げてい

る。ブックレポートは、授業やテキストの内容理解度の判断に用いる課題であるとし、説明型の 1 つに分類している。また、石井 (2011) は、ブックレポートは、指定された文献を読み、著者の主張や内容を要約するものであり、書き手の感想や意見を加える場合もあると述べている。このように、ブックレポートとは文献の内容の要約や要旨を述べ、その内容を理解していることを示すレポート課題と言えよう。

なお、課題の作成条件は、教員からの指示によって異なる。要約が文献全体なのか、重要な部分のみでよいのか、また、感想と意見のどちらを加えるのかといった指示について、学生は確認のうえ、作成することが求められる。大島他 (2012) は、ブックトーク (本や記事から読みとった情報をグループ内で報告しあう活動) から、その結果を反映させてブックレポートを作成する授業モデルを紹介している。そして、資料から情報を得る際には、著者がどのようなデータを根拠として主張を展開しているかを確認しながら読むことが重要だと述べている。

3. 本実践の概要

3.1 アクティブ・リーディング I の目標とクラスの概要

本学の言語スキル系科目における目標は、情報を整理して把握し、正確に伝える力の修得である。加えて、協働学習をとおして、分かりやすく説明することや相手の話を理解するために聴く姿勢を身につけることが求められる。2022

年度前期開講の「アクティブ・リーディング I」では、これらの目標を達成する手段として、ブックレポートを活用した。本を資料として情報をまとめ、考察を加え、レポートとして文章化を行う。加えて、スライドによる口頭発表を行い、相手に内容を正確に伝えるとともに、相手の話を受け止める姿勢を育むことを目標とした。

本授業は経営学部・法学部・スポーツ科学部・管理栄養学部の1年次から4年次までを対象とし、2クラス（担当：佐野・竹内の2名）開講された。佐野クラスの受講生は26名で、1年次生20名、2年次生4名、3年次生2名であった。また、在籍学部は経営学部が10名、法学部12名、スポーツ科学部4名であった。竹内クラスの受講生は28名で、1年次生18名、2年次生3名、3年次生6名、4年次生1名であった。また、在籍学部は経営学部が10名、法学部4名、スポーツ科学部13名、管理

栄養学部が1名であった。

3.2 授業の概要

2022年度の授業概要は表1の通りである。なお、第1回の授業はガイダンスのため、記載していない。全15回の授業は3部構成である。まず、ブックレポート作成の準備段階として、第2回から第6回までは文章の読解と、ブックレポートの構成に関わるライティングの基礎を学習した。次に、第7回から第10回までは1回目のブックレポートの執筆を行った。第11回から第15回までは、2回目のブックレポートの内容を口頭で発表した。

1回めのレポートは、教員指定の新書を2クラス共通の資料とした。2回めのレポートは、学生が各人の関心に応じて選択した新書を資料とした。レポートの長さは2回とも2000字程度を目安とした。

第2回から第11回までの授業では、協働学

表1 授業のスケジュール（網がけ数字は授業回を示す）

	テーマ		テーマ
2	文章の読解 (1) 資料の情報をまとめる	9	ブックレポート① (3) ブックレポートの作成 (ワークシート) ピア・レビュー
3	文章の読解 (2) 伝わる文章を考える	10	ブックレポート① (4) ピア・レビュー
4	文章の型・構成を知る (1) パラグラフ・ライティング	11	ブックレポート② プレゼンテーション (1) 発表の構成と準備
5	文章の型・構成を知る (2) 要約文	12	ブックレポート② プレゼンテーション (2) 発表 自分の選んだ本の紹介
6	文章の型・構成を知る (3) 事実の解釈・考察	13	ブックレポート② プレゼンテーション (3) 発表
7	ブックレポート① (1) ブックレポートの構成	14	ブックレポート② プレゼンテーション (4) 発表
8	ブックレポート① (2) ブックレポート作成 (ワークシート)	15	ブックレポート② プレゼンテーション (5) 発表 全体の振り返り

習を主体とし、ワークシートを用いたグループワークやディスカッションを積極的に取り入れた。また、授業における資料の読解ではジグソー法を活用した。ジグソー法とは、メンバーごとに担当を決めて教えあう技法であり、他のメンバーに伝える責任が学習の動機となる点が特徴である。本授業では、学習対象となる文章をグループメンバーの人数に合わせて分割し、それぞれをメンバーが担当して受け持った。同じ担当となったメンバーで担当者グループを作り、資料を読解し、事実と意見とを分けて要約する。その後、学習結果をもとのグループに持ち帰り、内容を紹介しあった。

第12回から第15回にわたり、学生は自ら選択した新書について、スライドを使用した口頭発表を行った。発表に対するコメントは、LMSのクリッカー機能を活用し、リアルタイムで全クラスのメンバーから即時に受け取り、一覧を発表者にフィードバックとして提示した。

4. 実践から明らかになった課題

本稿ではブックレポートの資料の読解における問題点に焦点をあてて報告する。

第一の問題点は、事実と筆者の主張を区別する読解技術の不足である。

第2回の授業では、ブックレポートには本の内容の紹介として要約が必要であることを説明し、新聞記事を資料として要約を行った。今回用いた新聞記事はウクライナ侵攻に関し、3人

の識者がそれぞれ異なる意見を述べる文章であった。ウクライナ侵攻は、2022年2月に勃発した現在進行形の情報である。2022年4月時点の学生にとって関心の高い内容であり、かつ背景知識を新たに必要とせず、筆者の主張も読み取りやすい記事と判断した。先述のとおり、ジグソー法を用いて読解作業を行い、授業後、課題として提出させた活動の気づきのうち、難しさを表明した主な意見を表2にまとめた。

表2からは、筆者の主張や意見が読み取れないことと、伝えるべき内容を取捨選択できないこと、また、どのような構成で相手に伝えればいいのか分からないことが示されている。このように、読解の難しさ、特に事実と筆者の主張の区別の難しさを訴える学生が全体の半数以上を占める結果となった。

第二の問題点は、読んだ内容を別の表現形式で書き直す技術の不足である。先述の新聞記事資料を例にあげると、見出しの表現を筆者の主張と理解しているのは正しいが、要約においても一字一句そのままであり、別の表現に言い換えることができない学生が多数を占めた。例えば、記事の見出しに「犠牲覚悟で原則守る意義」とあるが、これは、見出しに続く本文を読んだうえで考えると、「侵略を受けたとき、国の主権を守るためには占領を受け入れてはならず、犠牲者が出てでも武力で対抗すべきである」と言い換えられる。しかし、学生は、「犠牲覚悟で原則を守るべきだ」というように、ほぼ見出しどおりの表現を筆者の主張として用いてお

表2 新聞記事を読み、相手に内容を報告した際の気づき

文章の中に知らない語彙が多く、記事が何を伝えようとしているか分からない
どの部分が著者が最も伝えたいことが分からない
最初に何から伝えればいいのか分からない
どの部分を伝えればいいのか分からない
筆者の主張を明確に読み取れず、理解に自信が持てない

り、果たして正しく記事の内容を把握しているかは疑問が残った。このように、文章の内容の一部をそのまま切り取って使用してしまう表現が、筆者の主張のみならず、事実の要約でも同様に見られた。

このように、実践を通して、事実と筆者の主張との区別、さらに言い換え（パラフレーズ）の技術の修得が課題であることが明らかになった。

5. 2023年度に向けた課題

以上、2022年度のアクティブ・リーディング I における実践内容を報告した。2023年度においては、学生の読解能力の不足を補いつつ、ブックレポート作成に必要な技能の修得を余裕をもって行えるよう、授業スケジュールを調整する必要がある。

まず、読解指導は、学生のレディネスに応じた無理なく進めなければならない。そのため、読解資料は、複数の異なる出典のものを用いるより、レポート課題の対象となる本に限定して行う可能性も考慮するべきである。著者の主張とそれを支える事実との区別を指導の主眼に置き、ワークシートを用いて要約の作成へとつなげていくといった丁寧な指導が求められる。要(2012)は、ブックレポート作成を授業で実践した際に明らかとなった、学生の抱える問題点を報告している。その中には、事実と主張との区別がしづらいことや、文の構造を読み込まず、既知の語から短絡的に類推する傾向が述べられている。これらは本実践においても同様に見られる問題点であり、指導の在り方を含め、参考にすべき知見といえよう。

続いて、言い換え（パラフレーズ）の技術の修得である。ブックレポートでは、本の概要を要約して記述し、かつ読み手は適切な引用を用いて主張を述べなければならない。つまり、要

約と引用のどちらにおいても、言い換え（パラフレーズ）の技術が必須である。

ブックレポートの利点は、引用文献が対象資料1件のみでも作成可能な点である。通常のレポート課題であれば、複数の資料を用いて記述されているため、指導する教員にとっては、複数の資料の引用の正誤を判断し、指導するのは非常に手間がかかる。しかし、単一の資料を対象とした引用であれば、指導は容易となろう。

また、調査報告型のレポート課題における資料の引用と比較すると、最も感銘を受けた箇所を引用を用いて紹介し、かつ自分の主張を述べるという流れは、定着が容易なのではないだろうか。つまり、ブックレポートは学生が引用を用いる動機付けとしても効果的といえよう。このように、ブックレポートの指導は、読解力の向上と引用表現の修得の両方に役立つといえる。

本格的なレポートの執筆経験が不足している学生にとっては、資料を複数読み込み、それらから正確に引用したうえで論を展開するのは難度が高い。しかしながら、本授業の受講により、少なくとも一つの資料を正しく読む方略を学び、なおかつ当該資料からの引用技術を確実に修得してあれば、資料を複数用いるレポートへの足掛かりとしての効果が期待できる。

ブックレポートは、資料の内容理解度の判断のもととなるため、期末の学修判定に用いられる場合が多く、ブックレポートの作成自体を指導する授業は言語スキル系科目に限られている。ブックレポートの指導をアクティブ・リーディング I で行うことにより、基礎的なリーディングとライティングの力を学生が修得できるよう、授業を設計していく必要がある。

6. まとめ

以上、本稿では、ブックレポートの指導にお

いて、学生の資料読解時に見られる課題と、その対処の実践を報告した。学生が抱える主な問題点としては、事実と筆者の意見が区別できないこと、言い換えの技術の不足があげられた。これらに対処するには、資料の丁寧な読解指導とパラフレーズを意識した引用の指導が必要である。ブックレポートの作成は、将来的に複数の資料を用いる形式のレポート課題への準備となりうる。

参考文献

- 石井一成 (2011) 『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』 ナツメ社
井下千以子 (2014) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法』 第2版 慶應義塾大学出版会
大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子

(2012) 『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーションプレゼンテーションとライティング』 ひつじ書房

要弥由美 (2012) 『調査レポート執筆のための資料読解時に見える学生が抱える問題点』 『リメディアル教育研究』 第7巻第1号 pp.155-164

菅谷奈津恵 (2021) 「大学院科目におけるライティング指導の試み—ブックレポートの引用を中心に—」 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要 第7号 pp.299-308

森達也 (2014) 『たったひとつの「真実」なんてない メディアは何を伝えているのか?』 筑摩書房
「戦うべきか、否か」 『朝日新聞』 2022年4月15日